

俺の彼女はメイドさんだ。驚くことに、この現代の日本でもメイドさんは実在する。彼女の名はヘレナ・ハーフェル。俺の仕事先の先輩にあたるから、職場恋愛でしかもメイドさん。まあ、メイドさんであることはきつかけとしては大事だが、今はそこまで大事ではない。もちろん、メイド服の彼女を見ると興奮するのは間違いない。

俺の職場の朝は早い。仕事自体が楽なのだから、仕方がないといえは仕方がない。出勤先は冗談のように大きい屋敷だ。勝手知ったる職場の玄関で靴を脱ぎ、ふかふかした絨毯の踏み心地を楽しみながら二階に上がり、主の部屋のドアをノックする。毎朝当然のように、反応がない。何度かノックしてから、渋い木の扉を開く。カーテン越しの弱い光と豆電球しか光源がないせいで薄暗い。猫の大きな写真のポスターやカレンダー、大小いくつかのぬいぐるみが重厚な屋敷の雰囲気をはらげており、部屋の端の立派なベッドでは屋敷の主がベッドにもぐり込

んでいて、つややかな金髪の頭だけが見える。毎朝の光景だ。目覚まし時計はとくに鳴る時間だが、持ち主が止めてしまったのだろう、無言で時を刻んでいる。俺は本人を揺り起こす前にカーテンを大きく開き、部屋に陽光を取り入れ、ほんの少しもぞりとした主の掛け布団を全力で剥がす。

「うう……日光を浴びると死んでしまう……。あと一時間だけ……」

「浴びても死ななだろ起きろ」

未練がましく布団を取り返そうとする主、クロツの手をかわしながら、軽くツツコミを入れる。弱々しく伸びた手を引っ張り、ベッドに座らせて着替えを渡すところまでが毎日の仕事始めだ。のろのろと着替え始めたのを確認してから、ご飯を作るために下に降りる。

リビングに入ると、コーヒーのいい匂いが漂ってきた。珍しく三人分のコーヒーを淹れたばかりのメイド、ヘレナが俺に気付いて目を向け、艶やかな花のような笑みを浮かべる。

「あら、ユーズ、おはよう、ですわ」

美人は三日で見飽きる、というが、全然そんなことはない。光を跳ね返し輝く茶色の髪、意志の強さをほんの少し表すつり目、嫌味なほどには高すぎない整った鼻、小さくもつややかな唇、温かい陶器のような白い肌。

「どうしましたの？」

ぼんやりと見とれてしまった俺の眼前で、不思議そうに彼女は尋ねる。

「見惚れてしまった」

思ったことを正直に小さく呟くと、わずかに彼女は頬を赤らめてくすりと笑い、さり気なく顔を寄せると俺の唇を舐め、軽く口づけした。温かく柔らかい唇の感触、コーヒーの香ばしい匂いより蠱惑的に忍び込む、彼女の甘い香り。

「目は覚めましたかしら？」

くすくすと笑い、彼女は元の席に着く。これ以上ないくらい、俺も目が覚めたと思う。

寝ぼけ眼のクロツとヘレナ、自分の朝食を作ってクロツに食べさせ、学校に送り出すと、広い屋敷の掃除の時間だ。本来は毎日やらなくても構わないのだが、とにかく広い屋敷なので、毎日少しずつやっていかないと大掃除や来客の時に大変なことになりかねない。毎日やっていると意外と苦にならないもので、あつという間に昼になった。

屋敷での昼食はシンプルなものだ。ヘレナは魔術の実験や仕事のために夜通し起きて朝方眠る生活をしているし、クロツはテスト期間や長期の休みがない限りは学校で昼食を食べるので、

必然的にユーズが簡単な食事を作ることになっている。ただ、ヘレナが時たま昼食を食べるため、二人分の昼食を作るようにしている。今日はサンドイッチを作ることにした。自分で毎日買ってきているのだから当然だが、野菜もパンも冷蔵庫の中に過不足なく入っているし、調理器具もいままらどこにあるか迷ったりはしない。てきぱきと二人分のサンドイッチを作り、そして普段通り、作ったものをそのままトレイに載せてヘレナの仮眠室へ向かった。

ヘレナの仮眠室は地下にある。屋敷の地下はヘレナ一人が使っていて、ゴットハルト家の他の者は用事がない限りは特に立ち入ることはない。もつとも、だからといって内装自体が大きく違うわけではない。ただ、光が入らないのと、奥の方の実験に使っているらしいいくつかの部屋の前で圧迫感を感じるだけだ。

俺は片手で小さく扉をノックし、静かに開いた。廊下の電灯の光だけがうっすらと差し込み、ヘレナが眠っているはずの部屋をうっすらと照らす。ダブルの大きなベッドと、シンプルな木製の机、そして椅子が二つあるだけの殺風景な部屋だ。クロツと違い、ヘレナは電気を全て消して眠るのを好むので、光源は部屋の中にはない。もちろん、彼女が寝ていければの話だが。

部屋に静かに入ると、俺の予想と異なり、ヘレナは眠っていたわけではなかった。もつとも、先ほど起きたばかりのようで、白いロングキャミ一枚で、ベッドに腰かけている。ちらりと部屋への進入者、要は俺だが、を見て微笑みを浮かべると、ベッドサイドのライトをつけて無言

で椅子を勧めてくれたので、ありがたく椅子に座ることにした。机に置かれた金属製の水差しを脇にやっつけてからトレイを置く。お昼ご飯は、と声をかける前に、ヘレナは軽く礼を言っただけで隣の腰掛けて、サンドイッチを取る。寝起きのヘレナは普段のいい香りにほんの少しスパイスのように汗のにおいが混じっている。俺はこの香りも好きだ。

ヘレナの匂いだけを楽しんでいると笑われかねないし、俺も腹が減っている。ヘレナが起きているときはいつもそうするように、俺も一緒に昼食を取ることにした。

どちらも無言だが、決して気まぐれではない穏やかな時間だった。表面上はだ。俺は食事中もつついっただけのヘレナの胸元を覗いてしまい、どきまぎしてしまふ。ヘレナが寝る時はいつもキャミソール一枚で、下には何もつけていないはずで、それを知っているからなおのこと身体ラインと、その下の素肌を透かし見るように覗いてしまふ。それを証明するように、美しくたわわな胸元の双丘はそれを誇示するようだし、先端の突起も存在を隠さずうっすらとその姿を晒しているのだ。俺は否応もなく興奮し、股間のモノが少しずつ自己主張を始めてしまふ。ヘレナは俺の視線に気付いていない、わけではなさそうだ。少しイタズラっぽい笑みを浮かべ、俺がそうしているより控えめに俺にちらりと視線をくれながらサンドイッチを食べ終えた。

俺が食べ終わると、それを待っていたかのようにヘレナが左手を伸ばし、俺のズボンのチャックの上をやわやわと撫でる。遠回しな刺激に反応して、俺のモノがさらに大きく硬くなる。ヘレナはそれに淫らな喜色を浮かべて小さく舌なめずりした。

「あたくし、今日はお腹が空きましたわね。デザートをもらっても？」

デザートとはなにか、なんて野暮なことを聞き返すつもりはない。俺は期待を顔に出しすぎないよう気をつけながら、それでも大きく頷く。ヘレナは奇術のように滑らかな動作でチャックを降ろして下着から期待で大きくなりつつある俺のモノを取り出し、手袋をはめていない両手でやわやわとしごき、先端に軽く息を吹きかけた。柔肌が俺のモノに吸いつくように気持ちがいい。

「あらあら、新鮮で美味しそうですわ」

味見するかのように、鈴口に舌尖をつけ、ほじるように軽くつつく。俺の意志とは一切関係なく、快感でぴくり、ぴくりと動くモノの反応を楽しみながら、モノだけではなく付け根の袋も衣服から開放し、左手でやわやわと袋をマッサージし、モノの先端から根本まで、大きなス